



十二月の天地

摩訶生

海を渡り山を越し來りたる朔風は、峰を脅かし
麓を掠め里を拂ひ村を拭ひてすさび始めたり。

空薄黒くかきくもりて、あなといふ暇もなく、
時雨けり、慌てゝ人は走り入りけり、早や晴れに
けり。變化極りなき斜に來る此時雨と凜烈類なき
横より來る朔風とに、落葉は到る處にハラ／＼と
散りまがひ野は一面の灰色となり、草は種を殘し
て枯れ果つるあり、力を株に貯へて作るゝあり、
さながら骨のみ立てる落葉松の林冷やかに白み

て、所々に常緑樹のいたく黒みて聳ゆる、所謂冬
枯の天地となりぬ。

兎、狐、狸、猪、鹿など全く衣裳更をし終て、里近
く餌をわざわざに出て來り、屈強なる熊は餓を忍ひ
て大平を夢みつゝ、奥深く穴に隠れ入り、満山凡て
空しくなりぬ。唯有り、丁々斷續の反響時々寂た
る空山を破つて相應すると、石工の岩切る鉄槌の
音か、杣人の幹削る斧の響か、あらず勇ましき啄
木鳥が其強き嘴を以て敢然として樵の太き枝に向
いて働さつゝゝあるなり。

低く、茶の花は白く咲き、茶梅はさまざまに開
く、高く、椿は相次ぎで咲き出でぬ、眼白飛び來
りて頻に窺ふ。こは花より蜜を吸はむが爲なり。
一塊の水仙は床の上に盆栽のまゝ咲き匂ひ、庭の
一方に金剛葉しほらしく開き、顔石の側に、川岸

の蔭に、さては奥山蔭に縁濃く肥え太りたる藁吾
は黄金色の力ある花盛に咲き始む、冬枯の空尙花
に乏しからず。

柴賣る老爺は彼枯山より枯木の束を荷うて夕暮
に里に出で來り、花鬻ぐ兒、蜆賣る童、はのく
に町の中、花エー花、蜆ヤ蜆一と味ぶ聲、いと
冷に憐に聞ゆ。

十三日、夙に起きて人々ドンバタンなど勢よく
打ち騒ぐ、俗に之を煤拂ひといふ。質朴なる田
舎人のやうく煤拂ひ終へて眞つ黒となりて出で
來りたる其肩先に初雪ポロポロと降りかゝる、雪
の下、麥は盛に根に生長し、木賊獨り抜き出で、
緑一入麗はし。

廿日前後、砂糖鯉節鹽魚などの贈答始まる、廿
五日クリスマスに物の交贈あり、廿六日頃より餅

搗始まる、此頃鞋がけにて財布を肩に勢猛に眼
を光らし東西南北駆け廻る一種の愛嬌者盛に來
往す、三十日より門松を立て七五三繩を張り迎
年の準備に忙はしく、やうく除夜に至りて厄拂
の聲をかしきを耳にする頃、世は静に更け行きて
正に午後十二時、茲に一と先づ多幸多福なりし今
年を送りて、樂しき來年を迎へんかな。

大晦日定めなき世のさだめなり

冬至

せ、く 生

歲月は流るゝが如く、本年もはや師走とはなり
ぬ。師走とはもと陰曆十二月の異名なるが、總べ
て年内の事を「爲果つ」といふ意味なりといへば、
陽曆とても斯く言ひて能く當れるを覺ゆ。師走と

なりて仕果てし事は何やらん、過去の年内は嗚呼夢の如し。今に至りて萬事の忙しく、心落付かぬとて將何をか怨みん。

凡そ物始あれば必終あり、終ありて又始となるが常則なれば、此の天地の間陰陽循環の路程に於て、この師走を忙しき月好ましからぬ月なりと感ずる中にも、流石に又吾は將に來るべき年の始を待ち、物の新に榮えん様を思ひて將樂しき望を捨つるを能はざるなり。

一年中の陰氣は茲に極まり果て、將に一陽來復となるべき陰陽交換の季は實にこの師走なり。然も其交換の當日は古來冬至と稱し、年中二十四氣の一に數へ、節日をいひて都鄙皆之を祝賀せり。此の日若し朔旦(陰曆十一月)に當る時は、殊に之を朔旦冬至と名づけ、瑞祥として禁中にも公事を行は

せられし事史上に見ゆ。(曆法上二十年毎に一度は必ず此事ありといふ)。此の日太陽は天の黃道に於いて、赤道よりは最南方に遠るが故に、壯者よりは日の短きを嘆たれ、老者よりは夜の長きを訴へらるゝ年々の例にて、大抵は本月二十二日にして、本年も正に其日に當り諸學校の終業日は大方此の頃よりならむ。

貝原篤信先生の日本歲時記に「冬至は十一月の中なり、三至として一には陰極の至、二には陽氣始めて至、三には日行南に至る。此の故に至日ともいふ。冬至の前一日に至りて、陰氣長する事極まり日の短き至りなり。又夜長き事も極まれり。日の南に至るも極まれり。今日一陽來復して後陽氣日々長じ、日も漸く長くなる。陽氣の始めて生ずる時なれば勞働すべからず、安靜にして微陽を

養ふべし。閉戸黙坐して公事にあらずんば出行すべからず。又奴僕を勞働せしむる事なかれ」と記され、續いて其の由來の元祖とも思はるべき説を掲げて、「○易曰雷在地中復、先王以至日閉關、商旅不行、后不省方。」(復は易の封の名なり、雷は夏の今日より陽氣に復るとなり。されば先王も此の冬至の日に諸所の關所を閉づる故に商人も旅行せず。君にも引籠られて四方の政をもみそなはせずして御祝ひなさるゝなり)

○白虎通曰、此日陽氣微弱、王者承天理物、故率天下靜不復行役、扶助微氣成萬物也○(此の意はよく通ずるか如し、即ちこの冬至の日は陽氣弱せしむ尙靜し、天子は天の職を承けて天下萬物を理むる故に何事も此の日に靜にして勞役せしめず、微弱の氣を助けて萬物の生育を成さしむと。)○伊川易傳曰、陽始生甚微、安靜而後長故復之象曰、先生以至日閉關。朱子曰、一陽初復、陽氣甚微、不可勞動(意よく通ず)として尙左の一節と杜子美冬至之詩とを附記せり。

「今日饌を製し、家人奴僕等にも與へ、陽復を賀すべし。又先祖考妣の靈前にも獻じ、茶酒を供へ、新果をすゝむべし。」

天時人事曰相催。(天時と人事とは離れぬとなり、關係せざるものに非ず季節は日々人事を移し行くものなり)

冬至陽生春又來。(意よく通ず)

刺綉五紋添弱線。(綉さといふ織物に糸を刺してみれば、人には少しも感ぜざる陽氣か其の五紋に弱線を表す)

吹葭六管動飛灰。(六律の笛に葭の灰を込めて地中に埋めて置いて見れば陽氣は其の灰を吹き飛ばす)

岸容待臘將舒柳。(堤塘は臘月の來るを待ちて柳眉を舒ばさん風情なり)

天氣衝寒欲放梅。(人は寒氣に縮まんをすれども陽氣は之を冒して梅に芳香を放たしめんとす)

雲物不殊鄉國異。(杜子の境遇は今天地の風景は異ならずして郷國異なれる他郷の客なるべし)

教兒且覆掌中杯。(容なれどもこの冬至には愉快)
(一杯を傾くるさいふ意)

又冬至朔旦を賀したる事の正史に見わたるは續
 日本紀の左の一節を始とす。

「聖武皇帝の神龜二年十一月己丑、天皇大安殿
 に御して、冬至の賀を受けさせらる。親王及び
 侍臣等奇翫珍寶を奉持して之を進ず。即ち文武
 百僚五位已上及び諸司の長官大學博士等を引き
 て宴飲し、終日樂を極めて罷められ、祿を賜は
 ると各差ありら。是日大納言正三位多治比真人
 池守は靈壽の杖並びに絶綿を賜はりたり。」

爾後代々この事絶ゆることなく、室町頃までは
 此の公事行はれしと正史並に諸公卿の記録等に見
 えたれども、戰國となりては世の亂れと共に此の
 儀亦行はれず、明治聖代に至りては曆法の改正と
 共に亦是れありしを聞かずといへども、年中の一

大段落として諸官衙諸學校を初めとし、世間一般
 にこの季を以て事務課程の一段を告げ、残り惜し
 くも此の年を送り、又來ん陽春を迎ふべき送迎の
 休暇を設くるを見るにつけても、其の甚く處甚だ
 遠きが如さを思ひて、覺束なくも斯くは記しつ。

“Today is yesterday's pupil.”

今日は昨日の弟子なり

汽車旅行と道連の幼兒

私は十月の末に、日光山の秋を探らうといふの
 で、凜笛一聲上野ステーションを出發いたしました
 た。列車中には、随分いろ／＼の人が乗つて居り
 まして、思ひ／＼の話をして居ります。あ、何時
 來て見ても、汽車は一の社會をのせて走て居る、
 とおもしろく感じました。

さてこのやうなことを思つて居りますうちに、いつの間にか宇都宮に着きまして、上野以來の列車に別れ日光行のに乗りかへました。

ところが嬉しいことには、私の入りました列車中に、子どもが三人兩親に連れられて乗て居ります。そうして三人とも、そろつて首を窓からつきだして、何か話をして居ります。いかにも、汽車が嬉しいといふ様子で見るだけでも、心持がよいのでござります。子ども、汽車、汽車と子ども、子どもは皆汽車をよろこぶものでござりますが、こゝちよく走る車の運動、瞬間毎に變化する窓外の天然、之等が子どもの嗜好に投するのでございませう。

さて汽車は日光に向けて走りはじめました。私は三人のうち九才の女兒と話をはじめました。

まづ窓の外を走る木や、人や、向の山や、川から話をしはじめまして次のやうな問答をいたしました。但し子どもの詞は方言通に書きませう。

あなたの靴うちはどこですか。

人形町のやどやでおます。

ほんとうの靴うちはどこですか。

大坂でおます。

東京へあそびにいらしたのですか。

阿父さんや、阿母さんや、姉さんと一しよにあそびにきました。

あそびにきました。

けふはどこへいらしやるのですか。

日光の御宮はんへまゐります。

あなたは子一、大坂の靴うちで毎日何をしていらつしやるのですか。

學校へ往て、もどつたら舞をならひに行きま

す、姉さんは舞も三味線も習てます。

あなたのおうちは何屋ですか。

御昆布を賣てますのや。

東京と大坂とどつちがねすきですか。

東京の方がすきでねます。

なぜ東京がねすきですか。

東京やと、毎日見物に行けますさかい。

東京で方々へいらして、何が一ばんねもし

ろかつたのですか。

毎日芝居へ見物に行たのが一ばんうれしねま

した、わたしは芝居が大好、大坂のおうちで

も、いつでも皆一しよに見物に行きます。

そうですか、それではナ、あなたの一ばん

すきなものは何ですか。

芝居でねます。

其次は。

えいさのもの。

其次は。

御昆布。

其次は。

もうねまへん。

東京でナ、上野へいらつしやいましたか。

大きな人がナ、犬をつれて立てやほりまし

た。

上野で動物園といふ熊や虎の居る處へいらつ

しやいましたか。

そんなとこいかしまへん。

浅草へはいらつしやいましたか。

石の上にナ、おばあさんがねじぎをしてや

はりました。

まわ問答はざつとこんなものでございます。ま
だ子どもで、そうたてつゞけに問答もできません
から、外を見たりあそんだりしながら、話しあつ
て居るうちにはやくも日光につきました。私は殘
念ながらこの小さい道連に別を告げました。

舞、三味線、芝居、え、ききもの、一寸した子ど
もの話ではございますが、大坂の風俗をあらはし
て居るではございませんか。東京は毎日見物に行
けるからすきだとひふのは、あとでさけば芝居の
見物のことでございます。まだ九才の兒としては、
何とよほどの芝居ずきではございませんか。大坂
では始終見物に出かけるといふのですから、家内
中皆すきと見えます。上野に居た人といふのは、
皆様も御承知でございます。西郷隆盛の銅像の
ことで、淺草のねばあさんといふのは、瓜生岩女

の銅像のことでございます。此二は、上野と淺草
で、一ばんれもしろく感じたのでありませう。此
兒の觀察點が分るではございませんか。動物園の
ようなところへは親達は連れて行かぬものと見
ます。

あ、此兒大きくなつたらどんな娘になりませ
う。今頃はもう、大坂に歸て芝居にでも行て居
かも知れませぬ。
小さな子どもの芝居行、之はよほど考へもので
ございますせんか。

Wenn nicht zu raten ist, dem ist nicht zu helfen.

忠告して聞かざるものは助くるに道なし

益軒先生の年中家事

下村 生

貝原益軒先生の、學問も德行も兼ね備はつて、近世稀なる大儒であることは、だれも承知致してかりますことなれば、別段ここに申しません。先生は、漢學者でありましたが、廣く人を導くために、婦女童蒙にもわかるやうな極めて平易の國文で、修身衛生などの書物をいろ／＼書き著はされたのは、非常な實益を世間に與へたことと思ひます。私は、今年の夏期休業中に、九州の方に旅行を致し、福岡にも立ちよりました節、同地高等女學校在勤の廣島照子のさみの紹介で、貝原先生の遺族の家を訪問しました。それは、博多の瓦町といふに在つて、當主の方は、名を寛一と申し、益軒先生からは十代目とのことです。その折は、丁

度幸に書物の虫干をしておられて、益軒先生の少い時分からの拔書や、著述の草稿や、日記やら、その外書入本などが、澤山出してありました。許しを得て、自由に、凡そ半日ばかりの間、あれやこれや調べて、大いに益を得ました。それ等のうちに、『年中家事』といふ標題の先生自筆の小冊子がありまして、月々に分けて、家内にて執り行ふべき重なる事柄が、かきのせたものです。その十二月の分の中に、

拂煤塵事、今月中旬天氣溫和の日可也、下旬は過擾也、不拘日期、前日より器物をうつし、こもを取出し、篠竹の節ひさきを筋をこすり、長さ四尺はかりにして、二本可備、たたみたゝきなり、煤拂時井をおほふべし、兩戸の外に盗人の可取物を不可出、又拂時戸障子な

と障子悉く開くべし、奴婢に各新草履一足可與、上さうりなり、わらんじはあしく、是れかねてより作らしむべし、此日鷄鳴より起て、夜中に食し、早く拂しむべし。

との一節あり。細末のことまでよく注意の行きといきたるさま、從て家内の行事のさまりのよかつたことは、これで十分察せられます。序に、二月の條下の下男下女にかゝる一節をも左に記しておきおせう。

(上略) 買奴婢良法 必是を守るべし、此月奴婢を買ふに心を虚にし、舊年より所使の奴婢を可逐や否を決し、又今年可買者の長幼と、才幹能否の品を能定め置、買時に臨で所豫定を變改すべからず云々、

他の月の分も、おほかた、この類の事柄、右のや

うな書き方です。何によらず躬行實踐をもと、して重んぜられた先生の様子が、この一書でも、ありくとするやうな心もちが致します。

かやうな君子のつれあひとなつて、うるはしい家庭をつくられたのは、初子と申し、東軒といふ號でした。初子は、同じ筑前國夜須郡秋月の江崎廣通といふ人の女で、學問もあり、文筆にも長じて、夫の著述を助けられたことも多いのです。實父の廣通は、和漢の一通りの學問に通じ、手跡も立派で、私は、貝原氏にあるこの人のかかれた古今集の序を見ました。初子も書が上手で、隸書はことに巧であつたさうです。初子の傳に「最隸書に工にして、清適古雅、婦人の手に出でざるもの如し」(原漢)とあります。初子の書かれたものもいろくありました中に、『主語』『俗語』などは珍

しいものであります。益軒先生も音楽の嗜みあり、初子も琴の名手で、時々夫婦合奏して楽しまれたことが日記に見えております。なほかれこれ記したいこともありすが、題外の餘談ですから、ほかの時に譲ります。

(完)

なからへて花をまつべき身ならねど

大石 義雄

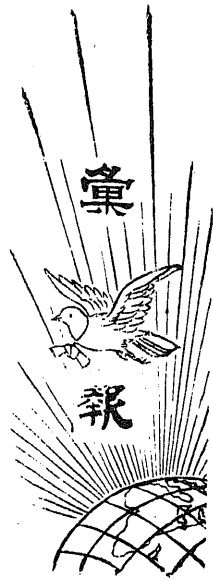
なほ惜まるゝ年の暮りな

Forget your past Circumstances, whether

they are Sorrows or joys.

The one is not without remedy, the other not perfect. Both are past; why remember them?

悲喜何れにせよ、過去の出来事は一切之を忘れ、悲は癒されざるなきにあらず、喜も完成には至らず。二者共に過去に屬せり、何ぞ故に之を記憶するや。



●陛下の御仁徳 天皇陛下が別して軍務上のことにつきて御精勵遊ばざるゝこと、申すも誠に異なきことながら、殊に今回奥州に於ける大演習にも親しく車駕を向けさせられ、御統監を遊ばされしが、泄れ承はる所によれば、演習の第二日目に於て陛下は仙臺地方幼年學校生徒の列を正して陪観せるを御覽じられ、同校長を御側近く呼寄せ玉ひ、幼年の生徒が昨日と云ひ今日と云ひ演習を陪観せる熱心嘉す可し、一同に行渡るやう菓物を買ひて與へよとの御沙汰を侍從武官長に命じ玉ひた